

第一章

書の歴史について考えるために

書、書道、書法、書芸術……。いまから三千年以上前に中国で生まれた文字「漢字」の美的表現にかかわる芸術ジャンルを、わたしたちはこのような言葉でよんでいる。

書の表現は、漢字を素材とし、漢字の意味するところを表記しつつ、同時に漢字そのものを美しく、うまく書こうとする意識のもとに進展してきた。そして、美しく、うまく書こうとした表現のありようには無限大のひろがりがあった。

美しく、うまくという意識あるいは意欲が、理論をふまえた実践として追究されるようになってからはもちろんのこと、そのような理論上の自覚がなかった時代でも、より美しく、よりうまく、という、人としてあたりまえの自然な意識、あるいは意欲のようなものは必ずあったものと考えられる。

たとえば西周時代の青銅器のひとつ〈大盂鼎〉の銘文。(図1、〈大盂鼎銘〉前半部分、木雞室蔵拓)この大きな青銅器に銘文がほどこされたのは、今からおよそ三千年も前のことである。この時代に書の理論書や技法書が存在したとは思われない。

しかし、三百字ちかくもある長い文章を、筆で清書した人物に上記のような意識、あるいは意欲がなければ、このような書は生まれなかったであろう。まさに東晋の王羲之や初唐の歐陽詢に匹敵するような、西周初期の書法の達人にしてはじめて可能な、この上ない高水準の書が実現されている。

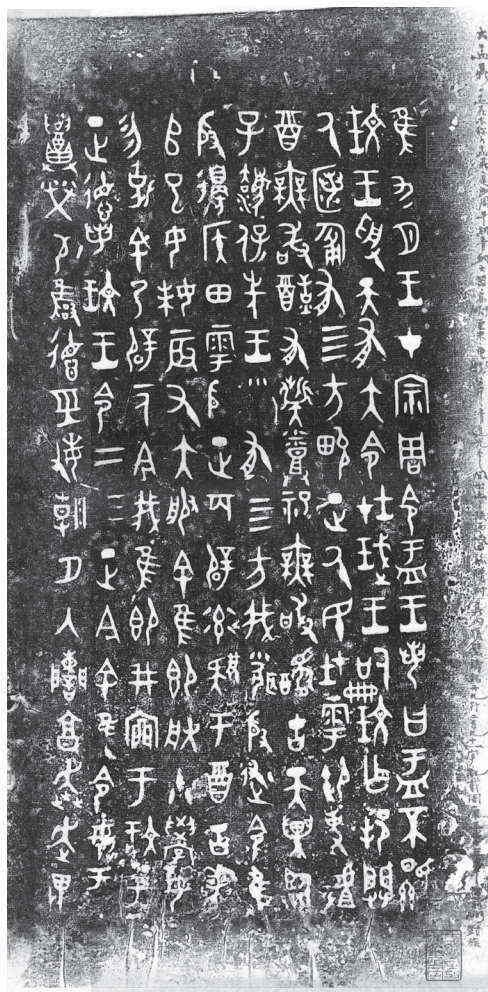


図 | 〈大盂鼎銘〉

あるいは、現在のわれわれが知らないだけのことで、甲骨文にしても青銅器の銘文にしても、これを下書きした人たちは、世襲的専門職として、特別の字書や過去の参考例のようなものをさずけられ、技術的訓練をつんでいた特殊階級の人々であったかもしれない。

◇

◇

さて、漢字の書体については、後世の便宜上の分類として、発生順に、篆書、隸書、草書、

行書、楷書の五種に大別されている。はじめの篆書は、漢字という文字が生まれて以来の絵文字的要素をもつ時代の書体であり、隸書以降の四つの書体は絵文字的要素から脱皮した書体である。

書体の変遷のなかで、新たな書体が生まれても、それまでの書体が一瞬にして消え去ることがなかったことの意義は大きい。旧が新にとってかわられても、旧はそのまま古い書体として温存された。そして、使われる場面があたえられつづけたという事実は重要である。このことがなければ、永い歴史のなかで、書が多彩な展開を見せることもなかったであろうから。

このことの最初期の例としては、漢代の石碑の文字があげられよう。すべてがそうであったわけではないようだが、石碑の銘文は当時の正式書体である隸書で書かれ、石碑名を表示した上部の額の部分は、篆書で書かれることが少なくなかった。

ひとむかし前のおごそかな篆書体の字姿に、威厳のようなものを感じ、その力をかりて石碑の偉容を保つべく、あえて篆書の体が使われたものと想像される。(図2、《韓仁銘》篆額部分、同朋舎出版『漢碑集成』より)

漢字はそれぞれの書体ごとに特有の文字構造がいかにされ、点画の複雑な組み合わせにより、多様な表現が生みだされた。そして、そのことには毛筆という特殊な筆記具の役割が大きくかかわっていた。獣毛の集合体である毛筆は、これを操作するうえでの工夫により、いろいろな表情をもつ点

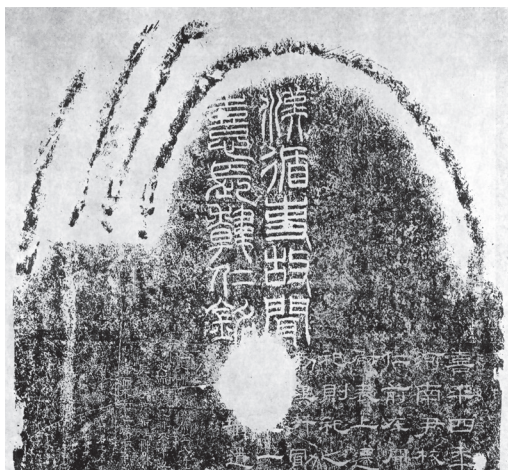


図2 〈韓仁銘〉

や画をつくることができるからである。

今から二千年ちかく前の漢代後期には、はやくも書は作者の品性の表現であり、胸中の反映でもあるという考え方が生まれはじめていた。このような早い時期から、人間精神の総合的なあらわれとして書が尊ばれるようになったことは、この芸術が独自の存在意義をもちつつ進展することができた大きな要因の一つでもある。

ところで、篆書というのはいわば古代漢字の総称である。事実としてはいくつもの書体に分かれるほどに内容豊富であり、複雑多岐にわたっている。

何種類もの被写素材、すなわち文字が書かれたり、刻されたりした材料の性質のちがいとも関連して、篆書の様相はきわめて多面的であり、隸書以降の四書体に匹敵するほどの大きな規模をもっていた。

今日にのこされている材料としては、殷代の甲骨文、殷周時代の青銅器の銘文、戦国時代の石

刻文字や布帛ふはくあるいは竹簡ちっかんに直接筆で書き記された文書などがある。

篆書の終着駅の形体は小篆しょうてんとよばれるもので、秦代しんに完成し、この時代の正式な書体となっていた。しかし、このころすでに篆書が簡略化された隸書が通用文字として行われはじめ、漢代にはこれが正式書体となった。

この時代、書体は一気に変化の動きを速め、隸書がさらに省略化された草書、そして行書が相次いで日常の実用体として知識人のあいだで用いられるようになっていた。

つづく三国時代さんごくには、行書の筆画をととのえた楷書がめばえ、おそくとも五世紀のはじめには完成の域に達していたことが確認されている。楷書につづく更なる新書体は生まれておらず、五つの書体の変遷はここに終止符がうたれた。



五つの書体のうちの最後の書体、楷書が完成してから今日までに、千六百年ほどの時間が過ぎ去っている。なぜこの間、楷書につづく「X書」という新たな書体が生まれなかったのか。なぜ楷書が書体の終着駅なのか。もし生まれていたらとすれば「X書」はどのような書体なのか。

どう考えても、容易には答えが得られそうにない難問である。楷書という書体それ自体が答えのカギをにぎっていきそうな気もする。しかし、考えを深めるための有効な回路はなかなか見出せそうにない。

以上、大まかに五つの書体の流れについて述べたが、この五つの書体のバトンタッチのうえで、もつとも大きな意味をもつものは、篆書から隸書へのバトンタッチであった。

篆書と隸書との間におこった大きな意味。それはつまり漢字書体における絵文字的要素との決別ということである。いわゆる隸変^{れいへん}という現象にかかわることで、これこそ書という芸術にとつての大事件であった。

隸書や草書は、もちろん行書や楷書も同じことだが、文字の形体そのものが直接的に意味をあらわしているわけではない。隸書や草書は、意味と何らむすびつかない、単なる点や線の組み合わせによる符号になっている。もちろん「山」とか「川」のように、たとえ楷書になつてからも、絵文字のなごりをとどめる文字がないわけではない。

とにかく、漢字はそれまでの絵文字的要素をすてて、大きく変身した。あるいは進化したといったほうがよいかもしれない。文字を成り立たせていた、むずかしい篆書の造形原理をぬぎすてて、一気に装いが改まつたのである。

漢字生誕以来のながい歴史をつらぬいて、不可欠の役割を果たしてきた毛筆という筆記具。この道具も、隸書や草書といった新たな書体への変身とともに、それまで以上に働きの内容を拡充することになった。

たとえば、隸書では、篆書時代にはなかったこととして、筆をはねだす表現によって一字をしめ

くくる、ということが行われはじめている。横画や右払いの場合は、いわゆる波磔^{はたつ}として、筆づかいの重要なポイントになった。

くりかえしこの筆づかいの練習をしている木簡^{もっかん}もいくつか発見されている。当時の人たちにとっては新奇な筆づかいであり、文字によっては表現を成り立たせるカギになっていたことがわかる。この筆づかいは、後世に生まれた更なる新書体、楷書の右払いにも受けつがれていった。(図3、

「之」字の習字簡)、中華書局『居延新簡(下)』より、これは後漢^{ごかん}の直前^{しん}、新時代のもの)

毛筆がもつ働きは、とりわけ草書の発生とともに、全面的に発揮されるようになった。つまり文字の点画そのものは簡略化されながらも、筆は上下運動をとめない、縦に、横に、斜めに律動的に運ばれ、時には裏返しに運ばれて、全方位的で立体的な表現を生むために使われるようになった。当然、このことにふさわしい筆の性能開発も進んだであろう。

草書を書くための新たな技術の習得も必要になったことになる。後漢時代のある文献には、「忙しくて余裕がなく草書では書けませんでした」という、ことわり書きを手紙の最後にそえる人が

図3 「之」字の習字簡



あったことが記されている。

手紙を草書で書くための手本かと推測されるものが、やはり後漢時代には作られていたらしい。いずれも草書という新しい書体で手紙を書くついでに、自分の能書をアピールしようとした知識人たちが増えはじめた証拠であろう。

あるいは能書をアピールするために、あえて手紙を書きおくた人たちもあったかもしれない。もちろん、このようなことは、この時代に一般化した習慣としてあったとは考えにくい。

書にすぐれた一人の知識人が、石碑の銘文の清書を頼まれば、文字の厳格な構成力と波磔のうまさ強調した隷書で、友人に送る手紙は自在な運筆の妙をつくした草書で、ということが行われていたのが、いまから二千年ちかく前の後漢の時代である。

ただし、当時はまだ拓本というものが存在しない。石碑の銘文をどんなに立派な書で完成したところで、その石碑の前に立ってこれを読むことができる知識人だけが、興味にあわせて、彫られた文字そのもののすばらしさを味わうことができた。

後漢の時代の多くの石碑は、例外なく銘文の内容を伝えるために作られたものである。しかし、文字が読める不特定多数の人たちに対する、史上はじめての野外における書の公開作品であったといえるかもしれない。刻された文字部分を朱塗りしゅぬにした石碑もあったであろう。

後世の作り話になるが、誰もが知る楷書の名人、唐とうの欧陽詢について彼が石碑の書を熱心に学ん

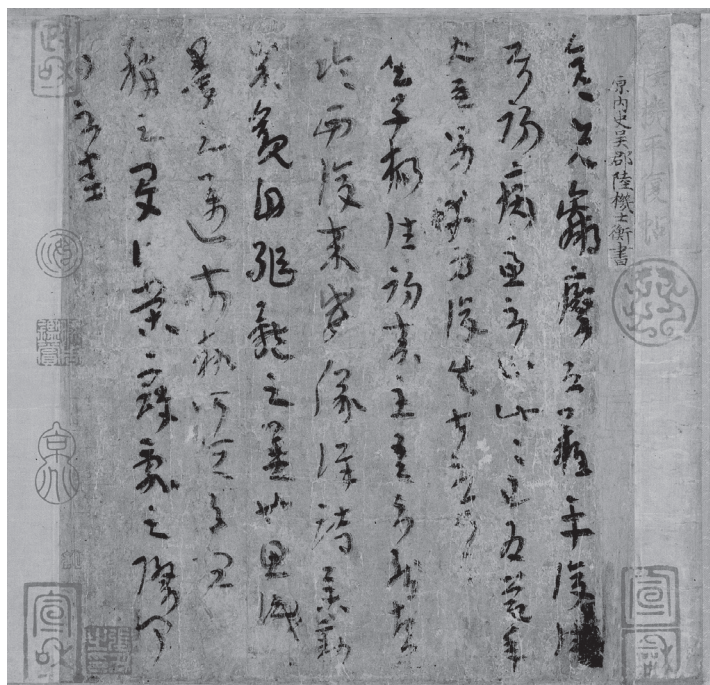


図4 陸機〈平復帖〉

だことを伝える次のような逸話がのこされている。

欧陽詢があるところを通った時、古碑をみつけた。その碑の銘文が、書の名人がかいたものであることを知ると、馬をとめて、しばらく見ながら立ち去った。しかし数百歩の後、ふたたび古碑の前にもどり、馬からおりてこれを観察した。つかれると毛布のようなものをして座りこんで観察した。近くに宿をかりてこれをつづけ、三日後に立ち去った。

隸書の石碑の前で、欧陽詢

と同じことをした漢代の知識人がいなかったとはいえない。

ともあれ、今日に伝わる文献にも、この時代の能書人の名が多く記録されている。篆書が隸書や草書に変身しなかったならば、知識人の中にこのような能書人も生まれず、その後の芸術としての書の進展もなかったものと思われる。

紙の発明と普及という観点も特筆しなければならない。すでに前漢時代には普及しはじめていたことが推測されている。つまり文字を書く舞台が大きく変わったということである。

それまでの竹簡や木簡では、何行にもわたって連続して文字を書くことができない。幅のある木札であれば何行かは書ける。しかし紙という面的舞台の自由さにはおよばない。筆をもつ者にとつて、行の展開というものが意識されるようになったのも、紙という平面が生まれたからである。

時代はすこし後になるが、真跡として今日に伝えられている西晋せいしんの陸機りくき（二六一―三〇三）の手紙はこのことがはつきりと見てとれる貴重な作例である。おそらく後漢の時代から、紙面に展開された草書によるこの種の手紙が、知識人の間で日常的にやり取りされていたであろう。（図4、陸機へいふくじょう〈平復帖〉、榮宝齋『中国書法全集』より）



後漢の時代から多く作られるようになった石碑の文章には、いろいろな内容のものがある。しかし、内容のいかんにかかわらず、だれが文章を作り、だれが文字を書いたか、ということが記され